



創基151年筑波大学開学50周年

# 自然を見る、感じる、記録する

ナチュラリスト青柳昌宏のスケッチと軌跡

Watching, Feeling and Drawing Nature:

Sketches and the Life of Masahiro Aoyanagi



会期：2023年4月10日～5月31日

会場：筑波大学附属中央図書館2階ギャラリーゾーン

主催：筑波大学自然保護寄附講座、人間総合科学研究群世界遺産学学位プログラム、生命地球科学研究群、生命環境群、下田臨海実験センター、附属視覚特別支援学校

後援：公益財団法人日本自然保護協会、ペンギン基金

# ごあいさつ

青柳昌宏(1934-1998)は、東京教育大学農学部農学科と理学部生物学科で、昆虫学と動物生態学を学び、和歌山県での教員生活を経て、東京教育大学附属盲学校に赴任しました。附属盲学校時代、日本とニュージーランドの南極地域観測隊に参加してペンギンの生態研究に携り、ペンギン基金初代代表を務める一方、自然保護教育をライフワークとし、日本自然保護協会の自然観察指導員制度を創設しました。附属盲学校時代に開発した、触って学ぶ生物学の授業方法は、日本自然保護協会の自

然観察指導員研修会において、五感を使って感じる自然観察の手法「ネイチュア・フィーリング」として発展し全国に広がっています。本展示会では、筑波大学の先輩でもある青柳昌宏の、学生時代の生物精密スケッチや、南極地域観測隊時代のフィールドノート、附属盲学校時代の触って学ぶ教材を中心に紹介し、自然を見つめ、感じとり、記録することの大切さをお伝えします。

主催者

あおやなぎ まさひろ

## 青柳昌宏年譜

- 昭和9 (1934)年 東京市赤坂に生まれる
- 昭和19(1944)年 和歌山県に疎開
- 昭和25(1950)年 和歌山県立粉河高等学校に入学
- 昭和28(1953)年 東京教育大学農学部農学科に入学、昆虫学を学ぶ
- 昭和32(1957)年 東京教育大学理学部生物学科に学士入学、動物生態学を学ぶ  
恩師下泉重吉が設立した日本生物教育学会の運営に携わる
- 昭和36(1961)年 和歌山県立那賀高等学校教諭として採用される
- 昭和44(1969)年 日本生物教育学会のオーストラリア動植物調査団に参加
- 昭和45(1970)年 東京教育大学附属盲学校に転任
- 昭和46(1971)年 第13次日本南極地域観測隊で生物調査を担当、アデリーペンギンの生態を研究
- 昭和49(1974)年 中央オーストラリア縦断サファリ隊を編成、ダーウィン～パース間を横断
- 昭和53(1978)年 ニュージーランド南極地域観測隊(カンタベリー大学ケープバード調査隊)に参加  
日本自然保護協会の自然観察指導員講習会を立ち上げる
- 昭和54(1979)年 筑波大学附属盲学校教頭就任
- 昭和57(1982)年 南アフリカ沿岸鳥類保護財団(SANCCOB)、ケープタウン大学パーシー・フィッツパトリック・アフリカ鳥類学研究所の招待で南アフリカを訪問
- 昭和61(1986)年 神奈川大学附属中・高等学校に転任、ペンギン基金設立(初代代表)
- 昭和63(1988)年 日本自然保護協会編『ネイチュア・フィーリング～からだの不自由な人との自然観察』の刊行にあたり監修者・執筆者として中心的に関わる
- 平成5 (1993)年 日本自然保護協会事務局長就任
- 平成6 (1994)年 日本自然保護協会理事就任、『テオリア～自然を知る50のヒント』刊行
- 平成9 (1997)年 神奈川大学附属中・高等学校校長就任 ガラパゴス諸島にてペンギンの調査
- 平成10 (1998)年 死去



# 「じっと見れば、見えてくるものがある」

青柳昌宏『テオリア』より

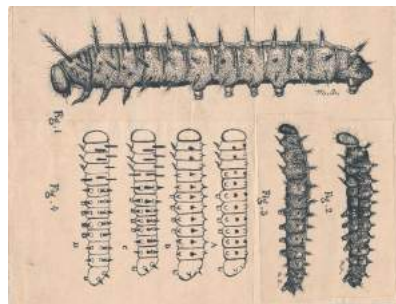
青柳昌宏は、太平洋戦争中、父の郷里である和歌山県に疎開したが、見知らぬ土地になじめず、また体も弱く中学校は半分くらいしか通学できなかった。しかしそのことで動植物に興味をひかれ、南紀生物同好会の活動にも参加するようになった。粉河中学校、粉河高等学校時代は、生物部に所属し、会報にすぐれた生物スケッチを残している。

東京教育大学では、農学部および理学部の授業や実習を履修し、詳細な授業ノートやスケッチを残している。1950年代、東京教育大学では、東京高等師範学校、東京文理科大学の流れを汲む生物学教育が行われていた。青柳は農学部の卒業研究で、国立予防衛生研究所の朝比奈正二郎の研究室に通い、ドクガとその寄生バチ・寄生バエに関する研究を行った。そのスケッチは、『衛生動物』という雑誌に掲載された。青柳は、農学部を卒業後、理学部に学士入学し、下泉重吉に師事して動物生態学を学んだ。動物分類学の丘英通の授業では、詳細な生物の精密スケッチを残している。下田臨海実験センターでは、プランクトンの採集、ウニ・ホヤなどの解剖を通じて、「こんなに多くの分類グループに属する動物が海にいるのか」という素朴な感想を残している。

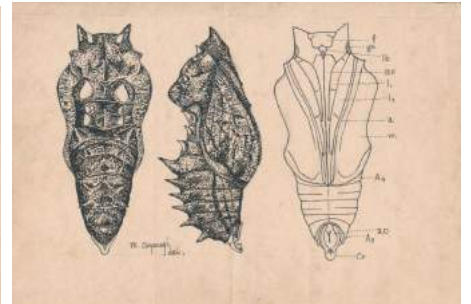
## ● 動植物の観察やスケッチに夢中になった中学校、高等学校時代



粉河中学校時代のウラギンシジミ幼虫のスケッチ



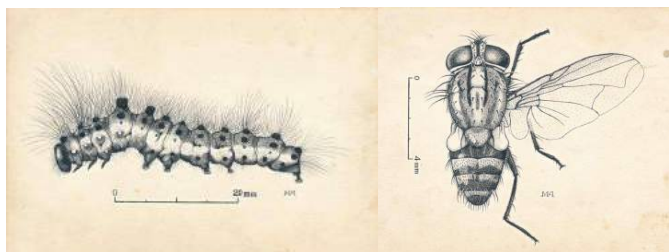
粉河高等学校時代のツマグロヒョウモンの幼虫と蛹のスケッチ



## ● 東京教育大学の授業や実習を通じて生物の多様性に魅せられた大学時代



東京教育大学農学部時代の青柳昌宏



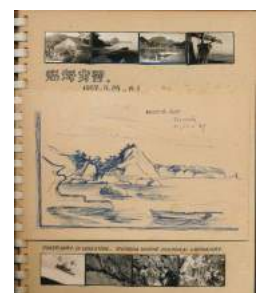
卒業研究の原図（ドクガ、ドクガヤドリバエ、モモクロサムライコマユバチ）



東京教育大学理学部時代の下田臨海実験所



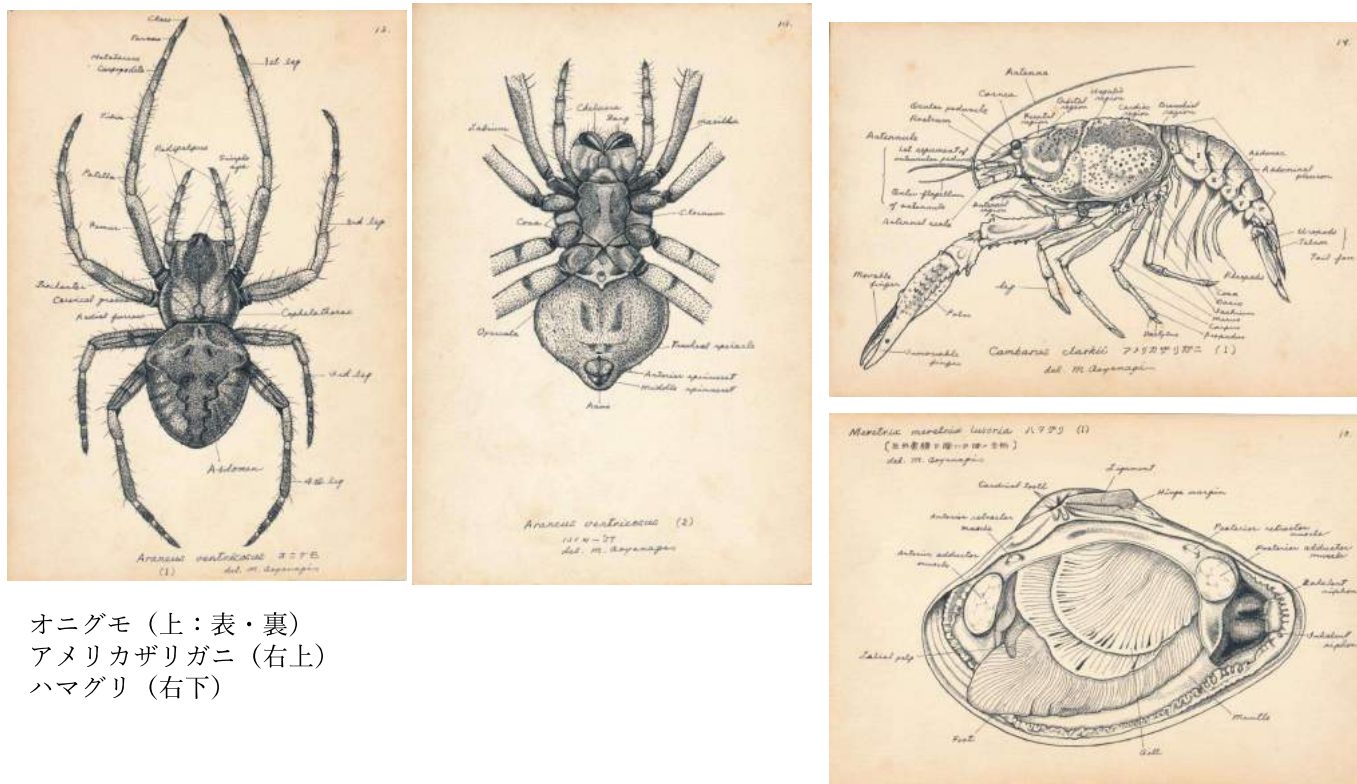
丘英通教授によるプランクトンの実習



下田臨海実習のアルバム

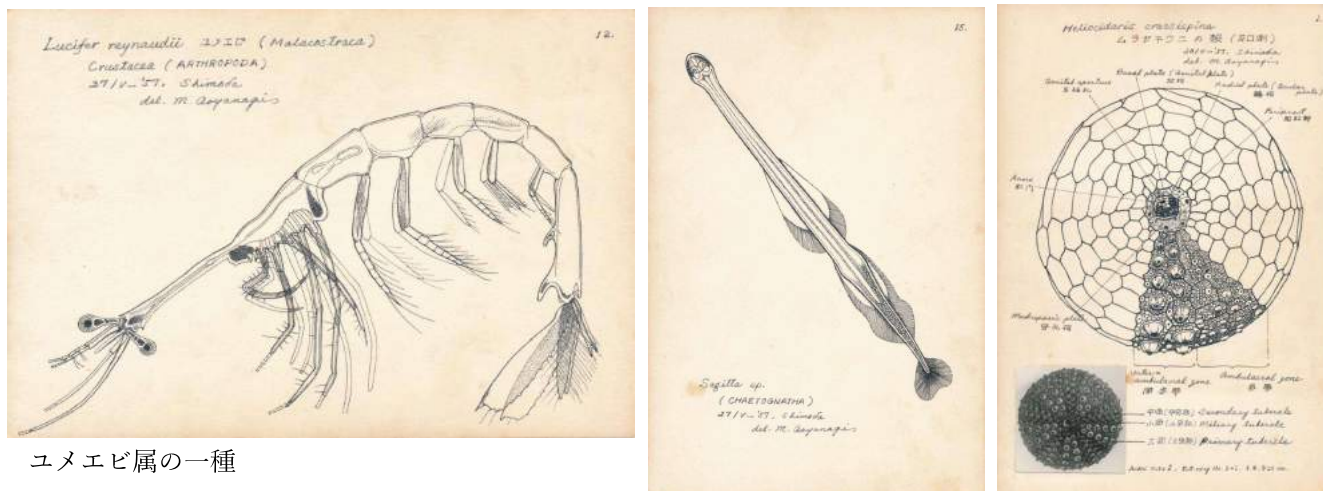
# 東京教育大学理学部時代のスケッチ

## ● 丘英通「動物分類学実験」でのスケッチ



オニグモ (上:表・裏)  
 アメリカザリガニ (右上)  
 ハマグリ (右下)

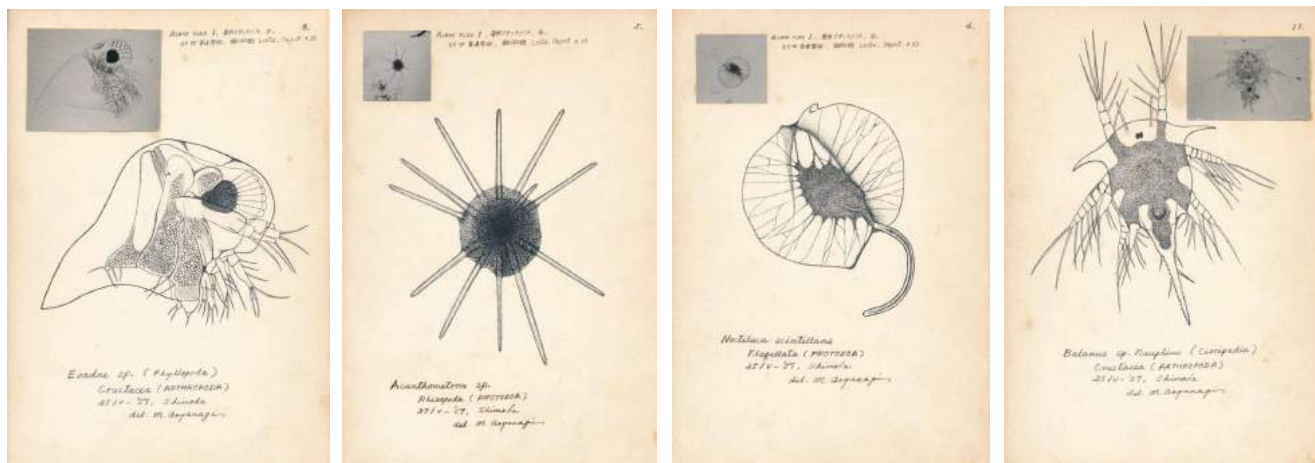
## ● 下田臨海実験所における実習でのスケッチ



ユメエビ属の一種

ヤムシ属の一種

ムラサキウニ



エボシミジンコ属の一種

ウミサボテンムシ属の一種

ヤコウチュウ

フジツボのノープリウス幼生

# 「描くことによって 見えてくるものがある」

青柳昌宏『テオリア』より

青柳昌宏は、1971年、第13次日本南極地域観測隊の生物担当の隊員としてアデリーペンギンの生態を調査したのを皮切りに、1978年には、ニュージーランド、カンタベリー大学の南極地域観測隊員としてロス島ケープバードに赴くなど、ニュージーランド・オーストラリアの亜南極、南アフリカのケープタウン、南米のガラパゴス諸島などに海外遠征を行いペンギンの生態を調査し、ペンギン基金の初代代表を務めた。

世界の自然を知ること、日本の自然を理解したいと考えた青柳にとって、南極やオーストラリアの砂漠は日本とは対極にある自然を持つ魅力的な場所であった。

教育者であると同時に、ナチュラリストでもあった青柳は、数多くのフィールドノートにペンギンの生態やその生息地に関するスケッチを残している。また、海外から家族に送った手紙にも、生き生きとした自然のスケッチが描かれている。

著書『テオリア-自然を知る50のヒント』には、「野外にはスケッチブック持参で出かけよう。スケッチしていると、自分の周りを時間が実にゆったりと流れていって、自然の中に浸りきるという感じになれると思う」と書き残している。

1971年、東京教育大学附属盲学校教員時代、第13次日本南極地域観測隊に生物担当の隊員として参加し、アデリーペンギンの生態を研究



1969年から1996年にかけて7回オーストラリアを訪問。1974年には、オーストラリア中央部の砂漠地帯を横断



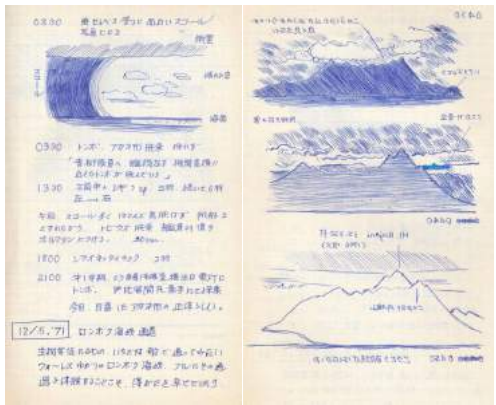
1978年には、ニュージーランドのカンタベリー大学の南極地域観測隊員として、ロス島ケープバードで、アデリーペンギンのボーカルコミュニケーションを研究



1982年には、南アフリカのケープタウンを訪問。沿岸鳥類保護財団(SANCCOB)の施設でペンギンの保護に携わる



# ● フィールドノートのスケッチから



1971年南極地域観測隊でのフィールドノート

1982年南アフリカ調査でのフィールドノート

# ● ペンギンのスケッチ

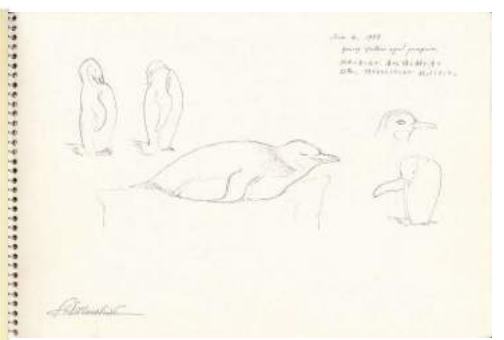
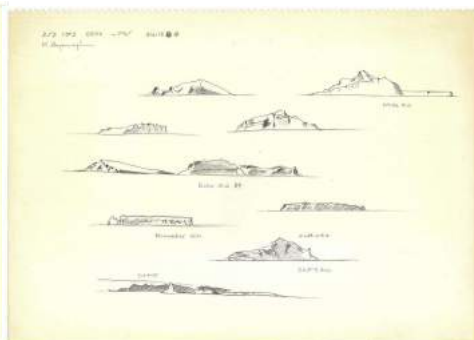


オングルカルベン島のアデリーペンギン  
さまざまなしぐさ

アデリーペンギン(抱卵)

アデリーペンギンと  
ヒナ・石ひろい

海からとび上がるアデリーペンギンと  
コウテイペンギン



オングルカルベン島アデリーペンギン  
ルッカーリーの一部

南極海 冰山10姿

ニュージーランド エンダービー島の  
キガシラペンギン

# ● 南極からの便り



1972年南極観測船ふじからの手紙

1978~1979年南極ロス島ケープバードからの手紙

# 「さわることのでわかることもある」

青柳昌宏『テオリア』より

東京教育大学・筑波大学附属盲学校の生物教員として、青柳は視覚に障害のある生徒たちとともに、校庭の樹木の葉や動物の骨格標本をさわって観察（触察）する授業を創り出した。また、プランクトンや細胞のように、さわることができない大きさの対象についても、持ち前のスケッチ力で本質的かつ単純化した原画を描き、サーモフォーム\*という手法で、さわって学ぶことができる触図を作成して授業を行った。

後に、青柳は『ネイチャ・フィーリング〜からだの不自由な人との自然観察』の中で、「彼らが『触ることによってわかっていく』過程は、目の見える私にとって実に刺激的な観察の経験であり、あらためて自然観察を見直すきっかけになった」と感想を述べている。

さわって観察する自然観察は、日本自然保護協会の自然観察指導の中で、ネイチャ・フィーリングとして共有され、だれもがゆっくりと五感をつかって自然を楽しむ自然観察の方法として、全国に広がっている。

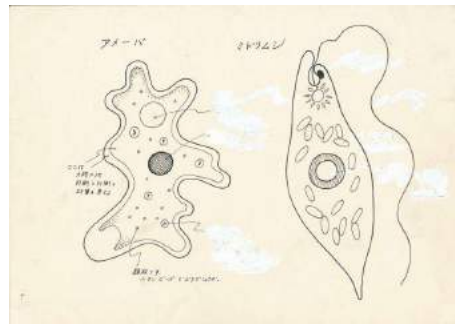
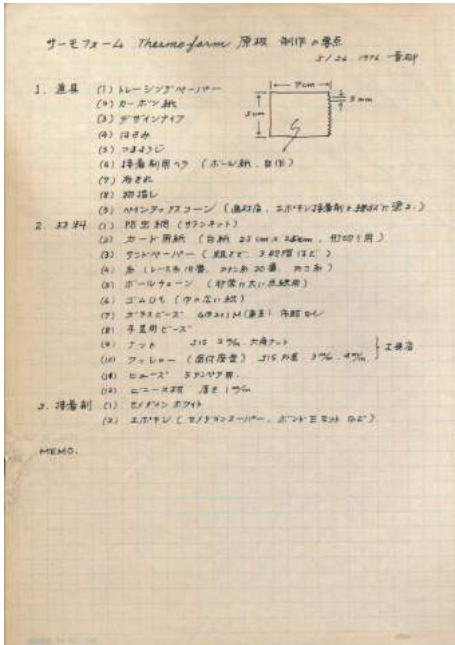
\*サーモフォーム：点字の複写装置としてアメリカで開発されたもので、原版の上にプラスチック製のシートを被せ、熱を加えてシートを柔らかくした上で、コンプレッサーで空気を抜き、原版とシートを密着させて、原版を正確に写し取る方法。

東京教育大学・筑波大学附属盲学校において、骨格標本や植物の葉をさわって観察する理科の授業。さわることができない細胞なども、サーモフォームで作った教材をさわって観察する



# ● さわって観察する生物の教材

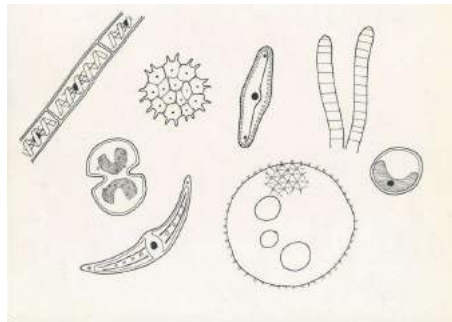
東京教育大学・筑波大学附属盲学校で青柳はサーモフォームによるさわって観察する教材を開発した



アメーバとミドリムシの原図



ミドリムシのサーモフォーム



サーモフォーム作成の手順書

ミカヅキモ、ツツミモ、ケイソウ、ユレモなどの原図とサーモフォーム  
(筑波大学附属視覚特別支援学校蔵)

# ● ネイチャア・フィーリング

さわって観察する自然観察の手法は、日本自然保護協会の自然観察指導員制度の中で、誰もがゆっくりと五感を使って自然を楽しむ「ネイチャア・フィーリング」として取り入れられ、全国に広がっている



長野県奥蓼科での自然観察会  
コメツガの木をさわって観察する



目や鼻を近づけてしっかり観察する  
土の匂いや湿り気を感じ取る



木の幹をゆすって、先端の葉が揺れる音で樹木の高さを知る「木揺り法」

自然を見る、感じる、記録する  
— ナチュラリスト青柳昌宏のスケッチと軌跡  
*Watching, Feeling and Drawing Nature:  
Sketches and the Life of Masahiro Aoyanagi*

執筆・編集：吉田正人、内田啓子  
協力者：鳥山由子、武井洋子、植原彰、志村智子  
発行者：筑波大学自然保護寄附講座  
発行日：2023年4月10日

展示物は、附属視覚特別支援学校蔵と記載したもの以外は個人蔵です  
本書の全部または一部を無断にて転載・複製することを禁じます



青柳が監修・執筆した日本自然保護協会の『ネイチャア・フィーリング からだの不自由な人たちの自然観察』



# 自然を見る、感じる、記録するーナチュラリスト青柳昌宏のスケッチと軌跡

## 出品資料リスト・解説(一部掲載)

【展示替】

前期4/10~5/7 ◇

後期5/8~5/31 ◆

2023年4月10日(月)~2023年5月31日(水)

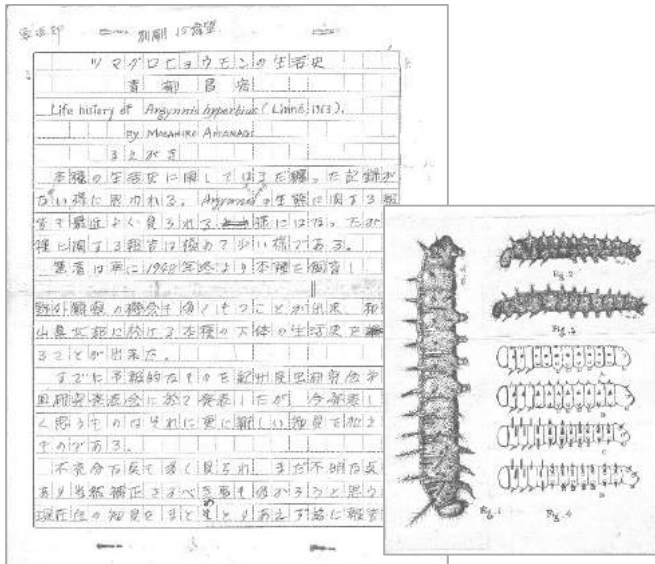
筑波大学附属中央図書館

資料番号	資料名	作者	頁数	制作年(月日)	技法・素材	サイズ	所蔵者
<b>A 高校時代の資料</b>							
◇1	『飼育記録』ノート	青柳昌宏	1冊	昭和26(1951)年~昭和27(1952)年	インク、鉛筆、紙	A5判 大学ノート	個人蔵
◇2	「ツマグロヒョウモンの生活史」原稿と原図	青柳昌宏	22枚 原図4枚	昭和26(1951)年	インク、鉛筆、紙	A4判 原稿用紙	個人蔵
<b>B 東京教育大学時代の資料</b>							
【講義ノートなど】							
◇3	一般植物学(石川茂雄)ノート	青柳昌宏	1冊	昭和28(1953)年	インク、赤鉛筆、紙	B5判 大学ノート	個人蔵
◇4	昆虫学(朝比奈正二郎)ノート	青柳昌宏	7枚	昭和32(1957)年	インク、紙	A5判 ルーズローフ	個人蔵
◆5	下田臨海実験所実習アルバム	青柳昌宏	1冊	昭和32(1957)年	インク、紙、写真	20.5×24.1cm	個人蔵
【精密スケッチ】							
《農学部時代》							
*農学部卒業研究原因							
◇6	ドクガ 幼虫	青柳昌宏	1枚	昭和31(1956)年	丸ペン、インク、紙	13.5×19.5cm	個人蔵
◇7	ドクガヤドリバエ	青柳昌宏	1枚	昭和31(1956)年	丸ペン、インク、紙	13.5×19.6cm	個人蔵
◇8	モモクロサムライコマユバチ	青柳昌宏	1枚	昭和31(1956)年	丸ペン、インク、紙	13.5×19.7cm	個人蔵
《理学部時代》							
*丘英通「動物分類学実験」							
◇◆9	アメーバ属の一種 <i>Amoeba sp.</i>	青柳昌宏	1枚	昭和32(1957)年	丸ペン、インク、紙	13.5×19.5cm	個人蔵
◇10	オニグモ-1 <i>Araneus ventricosus</i>	青柳昌宏	1枚	昭和32(1957)年	丸ペン、インク、紙	13.5×19.8cm	個人蔵
◇11	オニグモ-2 <i>Araneus ventricosus</i>	青柳昌宏	1枚	昭和32(1957)年	丸ペン、インク、紙	13.6×19.9cm	個人蔵
◇12	アメリカザリガニ-1 <i>Cambarus clarkii</i>	青柳昌宏	1枚	昭和32(1957)年	丸ペン、インク、紙	13.5×19.2cm	個人蔵
◇13	ハマグリ <i>Meretrix lusoria</i>	青柳昌宏	1枚	昭和32(1957)年	丸ペン、インク、紙	13.7×19.6cm	個人蔵
*丘英通「動物分類学実験」 下田臨海実験所							
◆14	ユメエビ属の一種 <i>Lucifer sp.</i>	青柳昌宏	1枚	昭和32(1957)年	丸ペン、インク、紙	13.5×19.9cm	個人蔵
◆15	エボシミジンコ属の一種 <i>Evadne sp.</i>	青柳昌宏	1枚	昭和32(1957)年	丸ペン、インク、紙	13.5×19.5cm	個人蔵
◆16	ウミサボテンムシ属の一種 <i>Acanthometron sp.</i>	青柳昌宏	1枚	昭和32(1957)年	丸ペン、インク、紙	13.7×19.8cm	個人蔵
◆17	ヤムシ属の一種 <i>Sagitta sp.</i>	青柳昌宏	1枚	昭和32(1957)年	丸ペン、インク、紙	13.5×19.8cm	個人蔵
◆18	ヤコウチュウ <i>Noctiluca scintillans</i>	青柳昌宏	1枚	昭和32(1957)年	丸ペン、インク、紙	13.5×19.5cm	個人蔵
◆19	フジツボのノープリウス幼生 <i>Balanus sp. nauplius(cirripedia)</i>	青柳昌宏	1枚	昭和32(1957)年	丸ペン、インク、紙	13.5×19.5cm	個人蔵
◆20	ベリディニウム属の一種 <i>Peridinium sp.</i>	青柳昌宏	1枚	昭和32(1957)年	丸ペン、インク、紙	13.7×19.6cm	個人蔵
◆21	サフィリナ属の一種 <i>Sapphirina sp.</i>	青柳昌宏	1枚	昭和32(1957)年	丸ペン、インク、紙	13.5×19.8cm	個人蔵
*入来重盛「動物形態学実験」 下田臨海実験所							
◆22	ムラサキウニ <i>Helicoidaris crassispinia</i>	青柳昌宏	1枚	昭和32(1957)年	丸ペン、インク、紙	13.6×19.9cm	個人蔵
◆23	ムラサキウニ <i>Helicoidaris crassispinia</i> (鉛筆スケッチ)	青柳昌宏	1枚	昭和32(1957)年	鉛筆、紙	13.6×19.8cm	個人蔵
<b>C フィールドノートに描かれたスケッチ</b>							
◇◆24	オーストラリア 『AUSTRALIA-NOTE VOL.1』	青柳昌宏	1冊	昭和44(1969)年~昭和45(1970)年	ボールペン、紙	9.5×15.7cm	個人蔵
◇◆25	南極 『observation なんぎょくしんぶんメモ』	青柳昌宏	1冊	昭和46(1971)年	ボールペン、紙	9.6×15.8cm	個人蔵
◇26	南極 『JARE-1』	青柳昌宏	1冊	昭和46(1971)年~昭和47(1972)年	ボールペン、紙	9.5×15.7cm	個人蔵
◆27	南極 『PENRE 1』	青柳昌宏	1冊	平成元(1989)年~平成2(1990)年	鉛筆、ボールペン、紙	9.5×15.7cm	個人蔵
◇◆28	南アフリカ、オーストラリア 『EECS CAPE TOWN』	青柳昌宏	1冊	昭和55(1980)年~昭和56(1981)年 昭和57(1982)年	鉛筆、ボールペン、紙	12.6×18.4cm	個人蔵
<b>D 書簡に描かれたスケッチ</b>							
◆29	青柳啓子宛書簡(南極観測船ふじより)オーロラのスケッチ	青柳昌宏	1枚	昭和47(1972)年2月25日	ボールペン、紙	20.2×25.2cm	個人蔵
◇30	青柳伯子宛書簡 南極ロス島ケープバードより 第3信 ケープバード アデリーペンギン北ルッカリー	青柳昌宏	1枚	昭和53(1978)年11月24日	ボールペン、紙	21.1×29.6cm	個人蔵
◆31	青柳伯子宛書簡 南極ロス島ケープバードより 第15信 海岸の氷の断面図、けがをしたアザランの手当	青柳昌宏	1枚	昭和53(1978)年12月31日	ボールペン、色鉛筆、紙	21.1×29.6cm	個人蔵
◇32	青柳伯子宛書簡 南極ロス島ケープバードより 第15信 アデリーペンギンの上陸失敗の様子	青柳昌宏	1枚	昭和54(1979)年1月1日	ボールペン、色鉛筆、紙	15.8×22.8cm	個人蔵

資料番号	資料名	作者	員数	制作年(月日)	技法・素材	サイズ	所蔵者
<b>E スケッチブックに描かれたスケッチ</b>							
◇33	オングルカルベン島のアデリーペンギン さまざまなしくさ	青柳昌宏	1枚	昭和47(1972)年1月19日	ボールペン、紙	25.7×35.7cm	個人蔵
◆34	アデリーペンギン No.0015 抱卵	青柳昌宏	1枚	昭和47(1972)年1月18日	ボールペン、紙	25.7×35.7cm	個人蔵
◇◆35	アデリーペンギン No.0015とひな 石ひろい	青柳昌宏	1枚	昭和47(1972)年1月18日	ボールペン、紙	25.7×35.7cm	個人蔵
◇36	海からとびあがるアデリーペンギンと コウテイペンギン	青柳昌宏	1枚	昭和47(1972)年2月21日	ボールペン、紙	25.7×35.7cm	個人蔵
◇◆37	オングルカルベン島 アデリールッカリーの一部	青柳昌宏	1枚	昭和47(1972)年1月19日	ボールペン、紙	25.7×35.7cm	個人蔵
◇◆38	アデリーペンギン No.0012とひな	青柳昌宏	1枚	昭和47(1972)年1月18日	ボールペン、紙	25.7×35.7cm	個人蔵
◇◆39	SANCCOBのジャッカスペンギン (ケープペンギン)のぬいぐるみ	青柳昌宏	1枚	昭和47(1972)年4月15日	ボールペン、紙	25.7×35.7cm	個人蔵
◇40	南極海 氷山10姿	青柳昌宏	1枚	昭和47(1972)年3月2日	ボールペン、紙	25.7×35.7cm	個人蔵
◆41	Mt.Sonder Safari Lodge (中央オーストラリア横断サファリ)	青柳昌宏	1枚	昭和49(1974)年8月8日	ボールペン、紙	18.2×26.3cm	個人蔵
◆42	ニュージーランド エンダービー島の キガシラペンギン	青柳昌宏	1枚	平成7(1995)年1月4日	鉛筆、紙	17.1×25.2cm	個人蔵
<b>F 筑波大学附属盲学校時代の資料、ネイチュア・フィーリングに関する資料</b>							
<b>*サーモフォームによる教材</b>							
◇43	ミドリムシ(サーモフォームによる触図)		1枚	1970年代	プラスチック	27.9×29.0cm	筑波大学附属視覚 特別支援学校
◆44	アメーバ(サーモフォームによる触図)		1枚	1970年代	プラスチック	28.0×29.0cm	筑波大学附属視覚 特別支援学校
◇◆45	クチビルケイソウなど(サーモフォームによる触図)		1枚	1970年代	プラスチック	27.9×29.0cm	筑波大学附属視覚 特別支援学校
<b>*原因</b>							
◇◆46	アメーバとミドリムシ(触図作成用原因)	青柳昌宏	1枚	1970年代	ロットリングペン、インク、紙	19.0×26.9cm	筑波大学附属視覚 特別支援学校
◇◆47	ミカヅキモ、ツツミモ、ケイソウ、 ユレモなど(触図作成用原因)	青柳昌宏	1枚	1970年代	ロットリングペン、インク、紙	19.0×26.9cm	筑波大学附属視覚 特別支援学校
<b>*原版</b>							
◇48	ミドリムシ(触図作成用原版)		1枚	1970年代	布、サンドペーパー、 たこ糸など、紙	16.5×24.4cm	筑波大学附属視覚 特別支援学校
◆49	アメーバ(触図作成用原版)		1枚	1970年代	サンドペーパー、 ガラスビーズなど、紙	17.0×22.3cm	筑波大学附属視覚 特別支援学校
◇◆50	クチビルケイソウなど植物プランクトン (触図作成用原版)		1枚	1970年代	布、糸、 プラスチックネットなど、紙	19.8×25.4cm	筑波大学附属視覚 特別支援学校
<b>*その他</b>							
◇◆51	「サーモフォーム <i>Thermoform</i> 原版 制作の要点」	青柳昌宏	1枚	昭和51(1976)年	ロットリングペン、インク、紙	18.2×25.3cm	筑波大学附属視覚 特別支援学校
◇◆52	『ネイチュア・フィーリング からだの不自由な人 たちとの自然観察』 日本自然保護協会	青柳昌宏監修 ・執筆(共著)	1冊	昭和63(1988)年 思索社 平成6(1994)年 平凡社	印刷	A5変型判	個人蔵
◇◆53	『ネイチュア・フィーリング 実践テキスト 多様な個性で広がり五感で深める特別な 自然観察会』 日本自然保護協会	鳥山由子監修 ・執筆(共著)	1冊	令和3(2021)年	印刷	B5判	個人蔵
◇◆54	写真:筑波大学附属盲学校 夏期学校における自然観察(木ゆすり法)	青柳昌宏	1枚	昭和54(1979)年7月16日	カラー写真	9.2×13.0cm	個人蔵
◇◆55	写真:ネイチュア・フィーリング観察会 (木の肌をさわって感じる)	青柳昌宏	1枚	1990年代	カラー写真	8.2×11.7cm	個人蔵
<b>G その他の資料</b>							
◇◆56	SANCCOBのジャッカスペンギン (ケープペンギン)のぬいぐるみ	SANCCOB	1個	昭和47(1972)年	フェルト、合成皮革、プラスチック	高さ30cm	個人蔵
◇◆57	青柳昌宏愛用の道具:双眼鏡、ボールペンなど	Niconほか	1台ほか	1970年代~		口径35mmほか	個人蔵



# 《出品資料解説》(一部掲載)

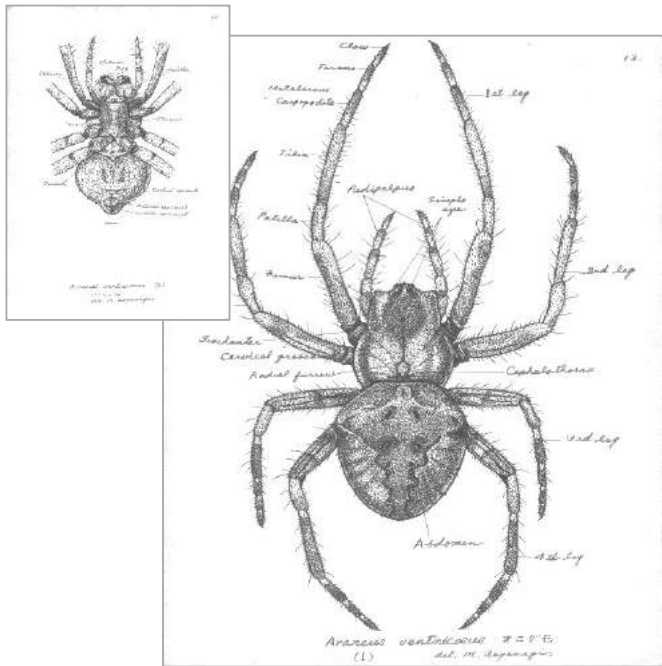


青柳昌宏 AOYANAGI Masahiro

2 「ツマグロヒョウモンの生活史」原稿と原図 1綴(22枚)

インク、鉛筆 1951年  
A4判 原稿用紙 個人蔵

青柳は、中学校時代から継続的に観察していたツマグロヒョウモンについて、『紀州昆虫』(3(1),5-12,1951)にまとめたが、これはその原稿と、挟まれていた原図4枚のうちの1枚である。ツマグロヒョウモンに関しては、この後にもいくつかの論考にまとめ、まだ明らかになっていなかった生活史の一端を明らかにした。当時青柳のような昆虫少年たちは、雑誌『新昆虫』などの「ムシペン」という投稿欄を通して全国の虫友と繋がり、アマチュア昆虫学者の磐瀬太郎(1906~1970)との文通によって、日本の蝶の生活史を解明していった。磐瀬太郎との交流は大人になっても続き、書簡なども残っている。



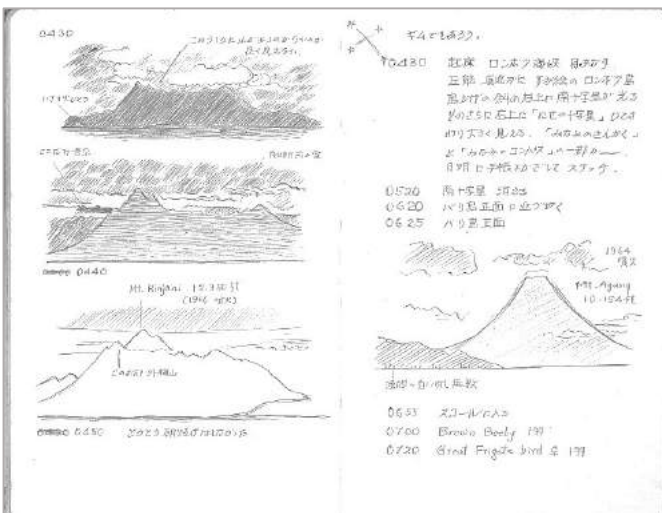
青柳昌宏 AOYANAGI Masahiro

10 オニグモ-1 *Araneus ventricosus* 各1枚

11 オニグモ-2 *Araneus ventricosus*

丸ペン、インク 1957年  
13.5×19.8cm 13.6×19.9cm 個人蔵

青柳が東京教育大学理学部3年次の丘英通(1902~1982)の動物分類学実験の授業で描いた精密スケッチ。丘英通は実験発生学の先駆者で、進化論を一般に紹介した丘浅次郎(1868~1944)の三男である。このオニグモ(表・裏)は、数多く残っている精密スケッチの中でも、とりわけ精緻に描かれている。当時実験授業の精密スケッチは成績になったため自ずと力が入ったようで、青柳は著書『テオリア』の中で、元々遠視だったが、このような精密スケッチを何十枚と仕上げる中で近視になってしまったと書いている。



青柳昌宏 AOYANAGI Masahiro

25 南極 『observation なんきょくしんぶんメモ』 1冊

ボールペン 1971年  
9.6×15.8cm 個人蔵

青柳は、第13次南極地域観測隊の一員として航海中、往復路で目視できた海鳥と南極観測船ふじに飛来した昆虫の出現記録を録っていた。これはその時往路で記録したフィールドノートである。アホウドリ、フルマカモメ等の海鳥の他に、数種のトンボの記録もある。1971年12月5日にロンボク海峡を通過した時の記述が興味深い。海峡の通過を完全に見届けたいと4:30に起床し「生物学徒たるもの、いちどは通ってみたいウォーレスゆかりのロンボク海峡、フルにその通過を体験することこそ、得がたき幸せ」と記している。

青柳昌宏 AOYANAGI Masahiro

28 南アフリカ、オーストラリア『EECS CAPE TOWN』 1冊

鉛筆、ボールペン 1980年～1981年、1982年  
12.6×18.4cm 個人蔵

フィールドノートの前半は、1980年から1981年、オーストラリアを訪れ自然観察をした時の記録、後半は、1982年に南アフリカを訪れた時の記録である。南アフリカのフラミンゴ、アフリカクロキなどの鳥類のスケッチが美しい。これは、南アフリカ沿岸鳥類保護財団(SANCCOB)及び南アフリカ水産庁長官の招聘とケープタウン大学パーシー・フィッツバトリック・アフリカ鳥類学研究所の招待を受け、訪問したもので、ジャッカスベンギン(ケープペンギン)の現状観察とペンギン保護について調査、レスキューセンターでのボランティア、ケープタウン大学において南極のペンギンについての講義などをおこなった。SANCCOBの創設者ウェストファル夫妻、ボランティアのパロウズ婦人との交流を示す資料も多く残る。

青柳昌宏 AOYANAGI Masahiro

41 Mt.Sonder Safari Lodge  
(中央オーストラリア横断サファリ) 1枚

ボールペン 1974年8月8日  
18.2×26.3cm 個人蔵

青柳が1974年8月、中央オーストラリア横断サファリ隊を結成し、ダーウィンより大陸中央のアリススプリングスを経て、パースに至る4460kmを踏査した際、グレン・ヘレンにあったマウント・ソンダー・サファリ・ロッジという山小屋と背後の岸壁を描いたもの。アリススプリングスからパースまでの半砂漠地帯は、日本人として最初の通過者になる地で、通過に許可を要する広大な原住民居住地域を含んでいた。1971年、南極観測船ふじに乗ってフリーマントルに寄港した時、ピナクルズを案内してくれた奥地ツアーのパイオニアとの出会いによって企図できた旅であった。青柳はこのように、世界の自然を知ることで日本の自然をより深く知りたいたいという望みを実現していった。

青柳昌宏 AOYANAGI Masahiro

42 ニュージーランド エンダービー島のキガシラペンギン 1枚

鉛筆 1995年1月4日  
17.1×25.2cm 個人蔵

青柳は、1994年12月から1995年1月にかけて、ニュージーランドと亜南極の島々をペンギン基金のメンバーと共に訪れた。(第2回PENRE) 青柳が設立したペンギン基金の目的の一つ、ペンギンの野生状態の観察と現地の保護団体との交流のためである。その調査を《ペンギン基金ペンギン調査 Penguin Research Expedition》と呼び、この時は亜南極の孤島の環境をゾディアック・クルーズ、あるいはブッシュ・ハイキングで体感し、11種類のペンギンと9種類のアホウドリを野生状態で観察している。このスケッチは、ニュージーランドの南に位置するオーランド諸島の一部、エンダービー島で描かれた。柔らかな鉛筆のタッチが、そのまま青柳のペンギンに対する温かい眼差しに感じられる。

自然を見る、感じる、記録する  
— ナチュラリスト青柳昌宏のスケッチと軌跡 出品リスト・解説(図録折り込み)  
執筆・編集：内田啓子  
発行者：筑波大学自然保護寄附講座  
発行日：2023年4月10日  
本資料の全部または一部を無断にて転載・複製することを禁じます